

日米におけるディスコ文化の受容と変容 ニューヨークのクィア・コミュニティと 東京の商業的空間の比較

上田光太郎

目次

序章 研究の背景と目的

- 第1節 問題の所在 3
- 第2節 用語の定義 4
- 第3節 本研究の視点と仮説 4

第1章 ディスコ文化の始まり

- 第1節 ストーンウォールの反乱 5
- 第2節 「The Loft」の思想 6
- 第3節 MUGEN と輸入文化としてのスペクタクル 7
- 第4節 起源の比較 8

第2章 全盛期の空間構造

- 第1節 パラダイス・ガレージ 9
- 第2節 スタジオ 54 と『サタデー・ナイト・フィーバー』 10
- 第3節 マハラジャとお立ち台 11
- 第4節 新宿ツバキハウスとサブカルチャー 11

第3章 踊りの比較

- 第1節 ペアダンスから「個の解放」へ 12
- 第2節 MIDI と 12 インチ・シングル 13
- 第3節 パラパラ 14
- 第4節 チークタイム 14

第4章 ブームの終わり方

- 第1節 「ディスコ・デモリッション」 15
- 第2節 エイズの流行 16
- 第3節 「新宿ディスコ殺人事件」とメディア 17
- 第4節 踊らない若者たち 17
- 第5節 郊外への拡散 18
- 第6節 ハウスへの深化とユーロビートへのガラパゴス化 18
- 第7節 「ディスコ」から「クラブ」へ——芝浦 GOLD 20
- 第8節 レイヴ・カルチャー 21

第5章 現代への遺産

- 第1節 ディスコの復讐 22
- 第2節 ヴェイパーウェイヴと「架空の日本」 23
- 第3節 現代日本のクラブシーンにおける「チャラ箱」と「音箱」の二極化 24

結論 24

概要

本稿は、1970年代から現代に至る日米のディスコ文化を対象に、その受容のされ方の違いを「空間」と「身体」という観点から比較・考察したものである。特に、ディスコが単なる娯楽としてではなく、人々が集まり、関係性を築く場としてどのような役割を果たしてきたのかに注目した。

ニューヨークにおいてディスコは、人種的・性的マイノリティが差別や抑圧から一時的に逃れ、自分らしく存在できる場所として機能していた。「The Loft」や「パラダイス・ガレージ」に代表されるクラブでは、明確な上下関係を排した空間構成と、即興性の高いダンスを通じて、参加者同士が強く結びついていた。こうした場は、彼らにとって安心して身体を解放できる「聖域」であったといえる。

一方、同時代の東京におけるディスコ文化は、高度経済成長期以降の消費社会の中で受容されていった。「MUGEN」から「マハラジャ」へと続く流れの中で、ディスコは西洋文化を体験・消費する場として位置づけられ、VIP ルームやお立ち台に象徴されるような空間の階層化が進んだ。また、ダンスも即興性より統一感が重視され、「パラパラ」に見られるような集団での同調が特徴となった。

しかし、本稿ではこうした日本のディスコ文化を一方的に否定するのではなく、管理された空間であっても、当時の若者にとっては日常から距離を取るための居場所として一定の役割を果たしていた点を評価する。さらに、新宿二丁目や小規模クラブなど現代の事例を通じて、ディスコ本来の「他者と身体を通じてつながる場」としての機能が再び現れている可能性についても検討した。以上を踏まえ、分断が進む現代社会において、ダンスフロアが持ちうる意義を改めて考察する。